石巻復興きずな新聞

第17号

本紙は、石巻市内の仮設住宅および市街地の復興公営住宅向けに発行・配布する無料情報紙です。毎月10日発行。

忘れられないふるさとの記憶と震災の教訓を後世に

間垣地区に慰霊碑完成

「この地に百数十名の人が確かに生活をしていた証しを後世に伝え、震災で亡くなった方々の御霊を祀り、あの震災の思いを忘れないために」

10月1日、大川地区の間垣集落に慰霊碑が完成し、式典が開かれました。「間垣地区に慰霊碑を建てる会」会長の木村清勝さんは、式典の挨拶で、慰霊碑建立への思いを語りました。

あの日、北上川をさかのぼる津波によって堤防が決壊し、集落の住民の約半数が犠牲となりました。その後、近隣の尾崎・長面・釜谷地区同様、間垣は災害危険区域に指定され、多くの住民が地区を離れざるを得ない状況になりました。「ふるさとがなくなってしまう」。不安と危機感を募らせる中、役員9名で慰霊碑を建てる会を設立。地区住民や間垣にゆかりのある方々からの協力を得て、数か月で予定額を満たす寄付金が集まりました。

完成した間垣地区の慰霊碑

震災犠牲者の名前が刻まれた慰霊碑の裏面には、「地震だ！津波だ！すぐ避難！」という警句と間垣地区の航空写真とともに、あの日あの時集落に何が起こったのか、詳細な記録が刻まれています。

月日とともに薄れていく災害の恐怖と防災の教訓が呼び覚まされるようです。震災で家族を亡くした佐藤圭一さんは、「ここは絶対に忘れることのできない、私たちのふるさと。思い出深いこの場所に慰霊碑が完成し、心の傷が癒される思い。残された私たちが、この場所を大切に守り、震災の記憶を後世に伝えていかなくては」と話しました。

慰霊碑は大川小学校より少し川上の、堤防の近くにあります。今は砂利の広場にぽつんと慰霊碑が立っている状態ですが、将来的には、遊歩道が整備され、東屋やベンチなどが設置される予定です。近くに寄った際には、ぜひ手を合わせてほしい場所です。

（きずな新聞　あき）

ありがとう橋通りコモン

11月5日、石巻の屋台村「橋通りＣＯＭＭＯＮ(以下、コモン)」が２年半の営業に幕を閉じた。コモンは、２０１５年４月に街づくりまんぼうが中心となり企画、スタートしたチャレンジショップ。震災後移住した若者やＵターン者ら、街なかでの店舗開設をめざす人々が集まり、飲食店など９の仮設店舗が営業してきた。

最終営業日の日中は橋通りが歩行者天国となり、近隣商店街によるジャンボ海苔巻きづくりやはねこ踊り演舞が行なわれたほか、20を越える露店が並んだ。夜には地元アーティストによるライブ演奏があり、この日コモンを卒業する４店舗から来場者への感謝の言葉と意気込みも伝えられた。とにかく終日、橋通りやコモンは熱気に包まれた。例えるならば、まさに川開き祭りのよう。

「あそこは若者が集まる場所」「ヨソから来た人の溜まり場」。そのような声も少なくない。確かにそういった面もあるかもしれない。一方で、この場所で多くの人たちが出会い、様々なきっかけができたとも聞く。近隣の商店主は、「コモンに集まるような、若い人たちの力を借りていかないと街はよくならない」と語った。コモンは来春、「ＣＯＭＭＯＮ―ＳＨＩＰ（コモン・シップ）橋通り」としてリニューアルオープンする。飲食店だけでなく、ワークショップやイベントを開催するようなスペースも充実させる予定だ。

10年後、あのときは賑やかだったと懐かしむのではなく、あの場所をきっかけに街が変わったと振り返られるように。来春以降の橋通りに、引き続き注目いただきたい。

（まんぼう　かりや）

あらゆる 困った！ に
対応サービスいたします！

≪主なサービス内容≫
遺品整理／生前整理／実家の片付け
お墓清掃／庭木の手入れ／草刈り／雪かき
引越しお手伝い／家具の移動／障子張り
引越し後の不用品処分／買い物代行 などなど

★参考価格★
草刈り　6,500円(50坪)～
お墓清掃　8,000円～
引越し手伝い　20,000円～

自衛隊歴30年！
2016年3月、故郷・石巻で開業！

ライフサービス
おまかせ本舗
代表／小野寺政昭
渡波字黄金浜148-8
090-8617-7928

●ゆいいきる●

インフルエンザ

一旦流行すると、短期間に多くの感染者が出るため、注意が必要なインフルエンザ。感染すると、学校や会社をお休みしなければいけないほど、感染力は強いです。

インフルエンザって？

インフルエンザと風邪の違いをご存知ですか？　インフルエンザは、喉の痛み・鼻水・咳などのほかに、急激な発熱（38度以上）という典型的な症状があります。関節痛・だるさといった全身症状が強いのも特徴的です。子どもやご年配の方、心臓や呼吸器の持病をお持ちの方は、肺炎などに重症化しやすく注意が必要です。

◆潜伏期間…ウイルスの潜伏期間は1～3日といわれているので、最近会った友人がインフルエンザに感染していた場合、3日経過するまではインフルエンザを発症する可能性があります。

◆感染期間…発症直前～発症後3日程度までが特に感染力が強いといわれています。熱が下がっても感染力は残っており、熱が下がったあと2～3日は外出を控えましょう。

予防するには？

◆予防接種を受ける時期は？…ワクチンの効果が出るまでに2週間程度かかるため、本格的な流行が始まる前、12月上旬ころまでに接種しましょう。

◆ウイルスはどこから侵入してくる？…体内へつながる入り口の口や鼻といった部分からです。手についたウイルスが口や鼻に入らないように「手洗い」&口の中のウイルスが入らないように「うがい」や「マスク着用」がポイントです！

かかってしまったら？

急激な発熱やだるさ、関節の痛みなどの全身症状が出た場合は、インフルエンザの可能性が高いです。すぐに病院へ！　マスク着用も忘れずに。

（牡鹿在住のつさとみ）

手洗いのポイント

指先・爪の間は念入りに！

指の間も丁寧に！

親指と手のひらはねじり洗い！

石けんで洗い終わったら、十分に水で流し、清潔なタオルやペーパータオルでよく拭き取って乾かします。

9月下旬から、北上川河口では秋サケ漁が始まりました。サンマほど大きくは報道されていませんが、今年も不漁が続いています。主力の4～5年ものの漁獲が少なく、小ぶりな3年ものが中心に。さらに、数匹程度しか獲れない日もあったようです。年数から化などがあったのでしょうか。磯焼けによるアワビの不良もあり、北海道ではイカやホタテ漁も不振と聞きます。旬の味覚への影響づらいので、回遊の変して震災の影響は考え

が避けられません。サンマ祭りは各地で中止され、年末年始に需要が高まるサケ・イクラの値の高騰も心配です。庶民の味が高級品になってしまうかもしれません。

これまでは話題になることが多い立場です。石巻地区とか北上地区全体を表してはいないおきまして、3年、4年、5年と、ずっと原因とされる病気がいろいろ多いようです。「天寿を全うされた」方も

先月、急性心筋梗塞で2週間入院しました。たまたま運がよく、大事には至りませんでしたが。夜、出先で動悸がして2時間ほど悶えていましたが、落ち着いてきたのでその日は車で帰宅。就寝し、翌日は朝食や弁当を作って子どもたちを送り出し、職場で最低限の仕事をこなしてから近くの診療所を受診しました。すぐに大きな病院へ救急搬送に。少し無茶をしたかなと思いました。「なぜ前日のうちに受診しなかったのか」とお叱りを受けました。

そんなこともあり、自分が感じた最近の健康について書きたいと思います。私は住職をしているので、一般の人よりは死と向き合うことが多い立場です。

小さなお寺なので、体を動かすことを断念しているこの2、3年、まこと

そんなに亡くなる方、亡くなる方が多いような気がします。健康な方が取り柄だと思

もちろんいらっしゃいますが、震災直後と比べ、若く亡くなる方が増えていると感じます。震災から5年以上経ち生活がある程度落ち着く一方で、震災前にあった医療機関の移転や閉鎖、生活再建に向けた忙しさなどから、医療機関にかかる機会が減ってしまったことが影響していると考えられます。

また、規模の大きな仮設住宅から規模の小さな復興住宅に移ったことで、健康に影響が出てしまうケースもあると耳にしました。散歩コースが短くなったり、コミュニティが小さくなって限られた人だけとのかかわりになったりするため、運動量や刺激が減って、足腰が弱る、認知症が進んだ影響があるというのです。

仮設住宅のときの見守り方の支援から、違ったかたちでのコミュニティづくりや人と人との接し方を考える時期にきているような気がします。健康な生活を続けるためにも、地域全体で考えたい問題ですね。

（北上十三浜　青山）

尾張屋再開物語

～器とこころ～

「全国のみなさん　本当にありがとうね　石巻人も頑張ります」

夕暮れ時にアイトピア通りを歩くと、こう大きく書かれたシャッターが目に留まります。陶器店「尾張屋」です。店主・近藤良一さん（81）が奥様の和子さんと切り盛りする尾張屋は、明治25年創業の老舗。店内には茶わんやお皿、つぼなどの瀬戸物が並びます。

震災では周辺の店舗同様、尾張屋も大きな被害を受けました。瀬戸物は棚から転げ落ち、そこに津波が押し寄せました。近藤さんらは2階に避難して無事でしたが、商品のほとんどは泥に埋まってしまいます。あまりの被害に、「再開は無理」と考えたそうです。

当然、商品はすべて廃棄するつもりでした。しかし、泥出しに励んでいたボランティアが、泥のなかから1枚、また1枚と破損していない瀬戸物を見つけます。「捨てるのはもったいない」という声に押され、割れなかった商品は洗って残すことになりました。

店舗の再開は考えていなかった近藤さん。それでも、懸命に働くボランティアに接するうち、「自分もなにかできないか」と思うようになりました。そこで思いついたのが、無事だった瀬戸物を被災者に提供すること。助けてくれたボランティアへの直接の恩返しではありません。でも、「助けられたぶん、その恩を別の人に返したい」と、提供を決めました。

「料理は器で食べる」と言われます。瀬戸物の提供には、「料理を器に入れて食事できたら、心が和むのでは」という近藤さんの思いがこもっていました。発災後の食事は配給のパンやおにぎり、その後はお弁当。そんな生活が続くなか、「同じ味噌汁でも、紙コップではなく器で食べてほしい」と考えたのです。

そして11年7月6日。「被災者には1家族10点瀬戸物を提供する」と告知し、近藤さんは店を開けました。ちょうど仮設住宅への入居が進むころ。約370人が来店しました。多くの人が「自分の食器」で新しい生活を始められたのです。

それから6年。近藤さんは今も店に立ちます。もうけは少なくても、復興公営住宅や再建した自宅へ移転するとき、気に入った瀬戸物で新生活を始めてほしいと、続けています。

「あぁ、瀬戸物屋さんがあってよかった。そう思う人がひとりでもいたら、やっている価値がある」と近藤さん。

今日も「ありがとう」を心に込めて、元気に営業を続けています。

（きずな新聞　くり）

店のシャッターと近藤さん

【所在地】中央2-5-10
【TEL】0225-96-8211

牡鹿半島 これからの居場所 vol.3

～雄鹿半島の過去・現在・未来を語ろう～

牡鹿の過去・現在・未来と牡鹿愛を語るリレー連載「牡鹿半島～これからの居場所～」、3回目は震災後に牡鹿半島に移住した美術家・太田和美さんです。

＊＊＊

過去・現在・未来って、すぐ側でつながってるんだなと、最近よく考えるんです。今、こうしてエッセイを書いているときも、刻々と未来が今になり、そして過去になっていく。今は自分と少し離れた出来事でも、未来には自分のことになるかもしれない。だから私は、身の回りで起こることを自分事として受けとめて行動しようと努力しています。

この夏、開催された芸術祭「リボーン・アート・フェスティバル」。私も地元作家として、仲間とアートユニットを結成。牡鹿半島のお祭りをテーマにした映画『マツリマツリテ』を製作し、私は主演で参加しました。狐崎浜に住む狐の娘が、かつて人間が暮らしていた浜に独りきりで生活をするもう一つの現在（未来）。娘は神社に閉じ込められた祭の音に導かれ、その賑わいを愛おしみ、でもどうすることもできない思いと寂しさを抱きしめて、金華山を望む御番所公園で祭を祀るという短編劇映画。

この映画をつくるきっかけは、牡鹿半島で行なった私の結婚披露宴でした。狐崎浜に移住したときから構想を重ねた狐の嫁入り行列。「昔は、やぐらを立てて、盆踊りを踊って、的屋もたくさんあったけど、踊りは忘れてしまった」。浜のお父さんお母さんたちのこの言葉が、私たちを映画製作へと突き動かしたのです。

被災地では人の命はもちろん、建物や風景、そして大切な思い出も犠牲となりました。私たちが生きていく中で、幾度となく対面するあらゆるものの「死」。でも記録をすることで回避できることもあると思うのです。

その一つが「祭」。いまを生きる私たちが動けば、後世へ伝えていける浜文化。祭は本来、一生懸命に働いている浜の人たちの心を解き放ち、明日への活力を養う存在であったはずです。なくなってしまったのには、少子高齢化や娯楽文化の発展、移動が便利になったことなど、もうどうしようにもできない現実がある。でも、このままなくなってしまうのは、とても寂しい。どんなに小さかろうが、誰もが羨やむ「祭」を残したい。そして、誰も住みたくなるような牡鹿半島になってほしいと願っています。

＊＊＊

おおた・かずみ／美術家。割烹民宿めぐろHOYAPAI女将。空間デザイナー。裏ボーンアートフェスティバル召喚作家。

映画『マツリマツリテ』より

かわら版
石巻まちなか情報局
http://www.ishinomakimatinaka.com/ Vol. 66

こんにちは！ 街づくりまんぼうの苅谷です。秋雨に台風と悪天候が続いていますね。そんななか、街なかの中央1丁目では10月21日に、区画整理事業の完了一年を記念したイベントが、開催されました。中央第一復興住宅の広場や集会所、ギャラリーを会場に、「中央一食堂」「昭和の石巻の写真展示」などの企画が行なわれ、多くの方が参加されました。

かまどベンチで芋煮

中央一食堂では、復興住宅に設置してある「かまどベンチ」を使って芋煮を作り、参加いただいた方に振る舞いました。芋煮づくりには、近隣の復興住宅の方々にも多くご協力いただきました。災害時などに「かまど」として使えるベンチ。多くの復興住宅に設置されていることを皆さんは知っていましたか？（すべてではありません）。でもなかには鍵がかかっていたり、使い方がわからなかったり、いざというとき使えない可能性も…。ぜひ一度確認してみてましょう。

特製中央一弁当！

中央一食堂のもう一つの目玉は「中央一弁当」の試食でした。魚屋、八百屋、総菜屋など食料品店が多く並ぶ中央一大通りの特徴を生かし、すべての食料品店から一品ずつ集めた中央一弁当を作りました。30個限定で集まって頂いた皆さんに試食いただきました。

開催中は奇跡的に雨は降らず、、いずれの企画も大好評のうちに終了しました。昨年のイベントよりも規模は小さかったですが、関わる人の数は格段に増えました。少しずつ「まちが開かれている」、そんな風に感じます。（まんぼう かりや）

▲かまどベンチでつくった芋煮。うまくできました～!!

●○●お知らせコーナー●○●

◆ボランティア募集
石巻復興きずな新聞舎では、継続的に活動を支えてくださる市民ボランティアを随時募集しています。活動内容は記事執筆、新聞配布、新聞印刷、データ入力など。月１日～参加可。月３日以上活動できる方には、交通費補助もあります。

◆購読会員について
自力再建、防災集団移転等により仮設住宅から出られる方で、「石巻復興きずな新聞を引き続き読みたい！」という方のために、「購読会員」という制度を作りました。年会費２千円で、毎月新聞を郵送します。希望される方は０９０－６６８６－８３１７まで。

◆活動資金へのご協力のお願い
石巻復興きずな新聞は、皆さまからの寄付によって支えられています。一日でも長く活動が続けられるよう、ご協力お願いいたします。
賛助会員（年会費３千円～）も募集しています。お気軽にお問合せください。

◎ゆうちょ銀行
八チイチ八チ店（８１８店）
普通　３８６４７４８
石巻復興きずな新聞舎

◎郵便振替口座
１８１４０-３８６４７４８１
イシノマキフッコウキズナシンブンシャ

編集後記

先月末、祖母が亡くなりました。祖父母にとって、私は初孫＆唯一の女孫で、それはそれは可愛がってもらいました。料理が上手で世話好きで、自分より周りを優先するような人だったので、いつもたくさんの人に囲まれていました。
２年前に祖父が亡くなったときには、火葬場で祖父を見送った後「よかった。お父さん（祖父のこと）より一日でも長く生きて、きちんと弔ってあげるのが役目だと思ってたから」と話していました。私はいつも夫と「私が先に死ぬから、後のことはよろしくね！」「いや、僕が先だし！」と言い合っているので、祖母の言葉を聞いて涙が出ました。
奇しくも告別式は私たち夫婦の結婚記念日。お互いの死も乗り越えられるような強さと優しさと愛情をもって、生きていこうと思いました。
（編集長 あき）

■石巻復興きずな新聞とは… 2011年10月～2016年3月まで、ピースボート災害ボランティアセンターが石巻市内の仮設住宅向けに発行・配布してきた無料情報紙「仮設きずな新聞」の後継紙。「最後のひとりが仮設住宅を出るまで」を目標に、2016年6月創刊。市内全仮設住宅および市街地の復興公営住宅に無料で配布。毎月10日、約6000部発行。

■石巻復興きずな新聞は以下の場所でも手に入ります。
ＩＲＯＲＩ石巻／雄勝店こ屋商店街／おしかのれん街／開成の拠り所・あがらいん／かめ七呉服店／からころステーション／川の上・百俵館／新蛇田第一集会所／道の駅「上品の郷」

■石巻復興きずな新聞舎
〒986-0813 石巻市駅前北通り1-5-3 TEL:090-6686-8317
kasetsukizuna@gmail.com / www.kizuna-shinbun.org

■発行元 石巻復興きずな新聞舎
■編集長 岩元暁子
■副編集長 川口 穣
■デザイン 矢野瑛子／妙本咲季
■記事執筆 青山英幸／太田和美／苅谷智大／栗田啓右／野津里美／
■協力 石巻専修大学関根ゼミ／石巻NOTE／川の上・百俵館／サードステージ／震災こころのケア・ネットワークみやぎ／包括ケアセンター／ピースボート災害ボランティアセンター／ゆいいきる／街づくりまんぼう／民宿めぐろ
■助成・協賛
宮城県「みやぎ地域復興支援助成金」、ラッシュジャパン「チャリティバンク助成金」